法学部

学部の現状が一目瞭然の「活動報告書」を作成

法学部
自己点検・評価委員会
前委員長
筑間正恭

㈠法学部自己点検・評価委員会は、「広島大学法学部自己点検・評価委員会内規」（平成四年六月二十四日制定・施行）に基づいて設置されている。その目的は、法学教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、法学教育研究水準の向上及び活性化を図り、かつ、社会的責任を遂行することにある。そのために、法学部の現状を把握し、その中で評価すべき点は更にそれを進展させ、必ずしも評価できない点は、学部全体の英知を結集して改善是正していけるように提示することなどが本委員会の使命である。

かかる目的・使命に資するために、平成四年度は、以下のような事項を所掌事項として取り上げることにした。

所掌事項　(1)法学部の理念と目標、(2)学生の受け入れ、(3)学生生活、(4)教育活動、(5)研究活動、(6)教員組織、(7)管理運営組織機構、(8)財政、(9)施設設備の整備・運用状況、(10)社会との連携、(11)国際交流

㈡委員は、九名である。委員は、学部長の任命によるが、評議員（学部長を除く。）、夜間学部主事、各講座がそれぞれの教官のうちから推薦するもの一名、学生委員、教務委員又は厚生委員のうちから選出されたもの一名、事務長から構成されている。このうち委員長は、学部長が評議員の中から一名を指名することになっている。

なお、学部長には、オブザーバーとして委員会に出席することを要請している。

㈢委員会の運営方針は、委員長がいかなる事項を自己点検・評価事項とするかを提案し、委員会で審議したうえで決定している。しかしながら、自己点検・評価の作業は本学部でも初めてのことであり、委員長として何をすべきか、何ができるのかにつき不安を抱きつつ、同時に他の委員の視線を気にしつつ、法学部の現状が一目でわかるものを作ることにしたと記憶している。幸いにも委員会での審議も活発で、かなり合理的・効果的に運営できたものと考えている。

㈣委員会は、平成四年度は四回開催したが、(1)に掲げた所掌事項につき、平成四年度活動報告書を作成すべく、委員等がそれぞれ所掌事項のいくつかを分担し、その間、事務サイドからはデータを出して貰うなどの協力を得て、また委員相互の連絡を密に図ってその作業を実施した。その成果として、平成四年度は、本文百二十四頁の「平成四年度活動報告書」を作成することができた。

㈤この「活動報告書」から、法学部が現在抱えている課題とそれに対する取り組みを抜粋すれば、次のように言えるであろう。

現在の我々に必要なのは、①新興学部としての十六年間の歩み（政経学部からの分離・独立は昭和五十二年のことであった）を基礎としつつ、「冬の時代」に耐え得る、二十一世紀を睨んだ独自性のある将来構想を築き上げることであり、より具体的には、②平成七年三月の昼間部移転を前にして、市内存置を要する夜間部の組織・運営計画を早急に明確化すべきこと、③現行の夜間部が昼夜開講制の組織・運営になることも考慮して、西条の昼・広島市内の昼夜という三つの教育負担に耐え得るような体制を検討・整備すべきこと、その上で、④学部の目的・理念に応じた教育・研究の拡充を果たすために、長年に亘り積み重ねられてきた議論と、新設置基準の下での総合科学部との交渉・協力を基礎として、学部のカリキュラム改革を完成させること、そして、⑤教育の高度化の要請に応じられるように大学院を充実させることである。

現在、①の課題につき、新たに組織された「組織運営検討委員会」が将来計画の検討に当たっており、②、③の点では、平成三年十一月二十九日に提出した「広島大学法学部第二部・経済学部第二部改革概要」に基づいて、移転実施委員会・二部問題検討委員会が、必要に応じて組織・経費面をも含めたシュミレーションを描きつつ、細部の詰めを行っている。④、⑤の課題については、学部カリキュラム検討委員会を中心として、とりあえず、一・二年次専門教育の充実を主眼とした来年度の改革が提案されており、七年度以降のあり方についての検討と、総合科学部との交渉も継続的に行われている。また、大学院については、政治学系では独立研究科の構想が動き出しつつある上に、法学系では大学院カリキュラム検討委員会が改革の方向を模索して協議を重ねている。

㈥こうして、平成四年度の自己点検・評価は所期の目的を達成できたと評価できるところであるが、報告書作成過程では、ご他聞にもれず期限までに原稿が集まらず、入力中のコンピュータも壊れるなど悪戦苦闘の連続であったように思う。任務を一応終えた今、法学部の現状、問題点、評価すべき点など多少なりとも明らかにし得たのではないかと自負しているところであるが、制度いじりもさることながら、大学の改革はまず教師の側にあり、学生を引きつける授業などができるよう日夜努力することこそが肝心であるとつくずく思うのである。